

④ 膈の出入の円滑化

別録における「治脇風痛」は栝楼根と同様に膈の出入を調整する作用がある可能性を示唆している。

⑤④ 「治諸痺」「療金瘡（外傷）」「止痛」および催乳作用などから、胃の気津を脈中の血、脈外の気へとつなげることがわかる。

◆治諸痺、療金瘡について

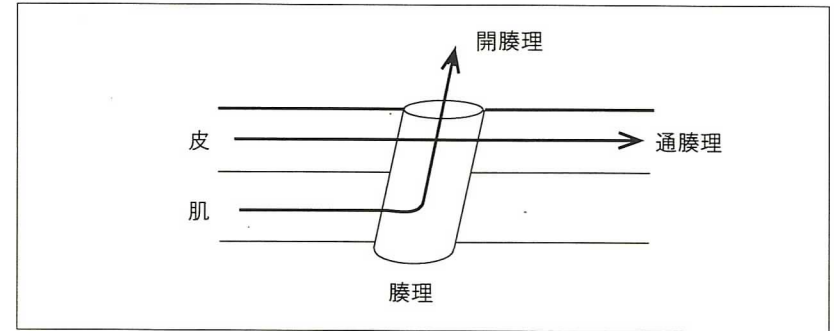
本経の中で治痺作用のある生薬は多く、その中の一部は去湿利水剤に属す。例えば朮、沢瀉、薏苡仁、車前子などである。一方、本経・別録二書の中で、治痺とともに療金瘡、統筋などの作用のあるものは牛膝、乾地黄、独活、防風、呉茱萸、（厚朴、）葶藶、附子、沢蘭などがあげられる。

この中で葶藶は別録中に「関節老血」、沢蘭は本経中に「骨節中水」と、特殊な効能を載せているが、葛根を含めて、治痺、療金瘡、統筋の効能を持っている生薬の一部には、治痺と同時に通絡の作用をあわせ持つと考えることができる。これは、葛根の胃気を上方の心・心包に上げる作用（前出③）と胃津を生じる作用（前出①）を考え合わせれば、葛根は胃津を肌・筋・肉、また腠理まで運んで潤すと同時に、肌・筋・肉の湿を薬の組み合わせによってはとり去ることができるからである。

◆通腠理・開腠理について

葛根は桂枝と同じく外・上方の二方向性のベクトル性を有する。桂枝と異なるのは、胃津を生じる作用があり、これを脈中の血・脈外の気および肌気・皮気・腠理に送り込むことができる点である。

通腠理とは、腠理を皮と平行して走ることであり、開腠理とは、腠理を皮・肌と垂直に走ることであり、したがって二者の意味は異なっている。



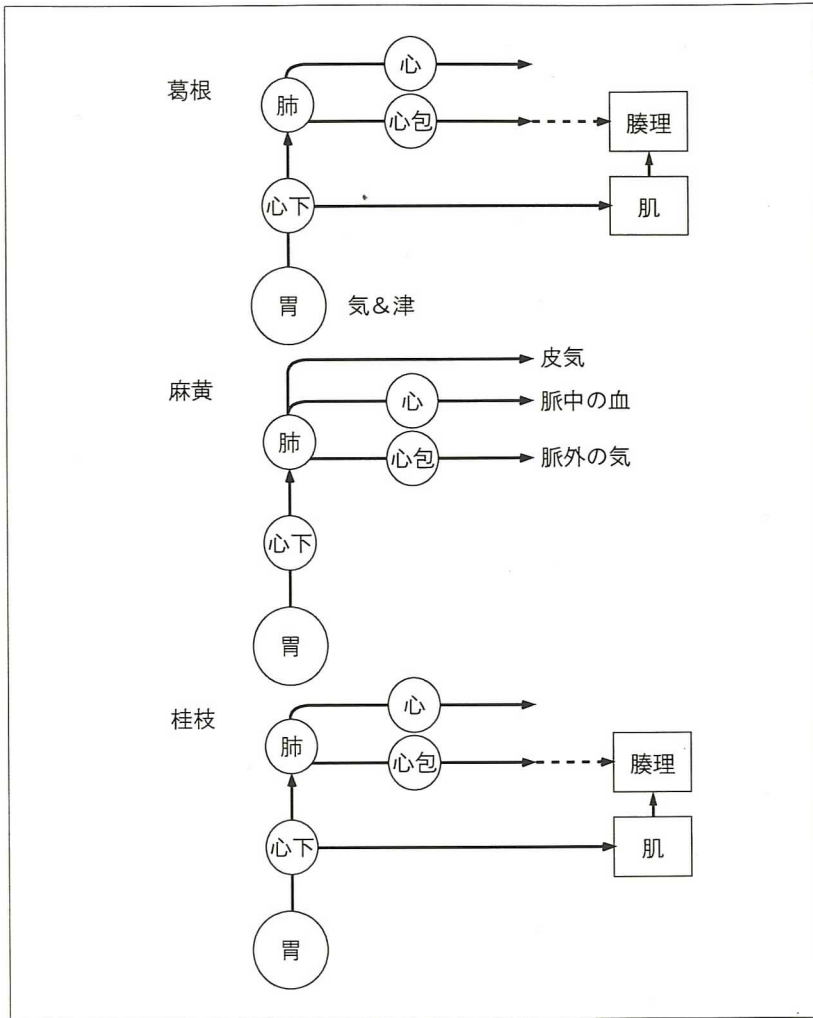
本経・別録において麻黄、防己は「通腠理」、葛根は「開腠理」、呉茱萸は「開腠理」とある。桂枝は菌桂・牡桂・桂のいずれも腠理への言及はないが、「出汗」作用が記されている。したがって桂枝についてあえて記すならば、開腠理作用を有することになる。

さらに附子は、甘草附子湯（甘草二両、附子炮二枚、白朮二両、桂枝四両）の投与後、熱粥の助けがなくても「得微汗」とあるので、やはり開腠理の作用を有すると考える。桂枝湯において、桂枝三両、生姜三両であるが、甘草附子湯は桂枝四両、附子二枚である。この二薬により脈外の気を強く推進し、その結果腠理を開いて発汗させる。また桂枝湯は、桂枝、生姜のみでは開腠理の作用が弱いので、熱粥を食べて胃気を助け、温めて外達力を高めている。一方、桂枝加葛根湯の場合は熱粥の助けがなくても外達が可能である。

桂枝・附子・葛根はそれぞれ開腠理作用を有する。

外達、発汗の作用は、下記のごとく二味、三味の組み合わせ、あるいは麻黄を加えるとその作用は強くなる。

- 桂枝+麻黄
  - 桂枝+葛根
  - 桂枝+附子
  - 桂枝+麻黄+葛根
- 麻黄+附子  
黄
- にて開腠理、外達力、発汗力が強化される。



◆葛根と項背強について

葛根の効能は本経においては「治消渴。身大熱。嘔吐諸痺。起陰気。解毒。葛穀治下利十歳已上。」であり、特に「治項背強」の記載はない。筋・肉に対する津液の供給（脈外の気津、肌の気津）が一定不

足すると、不足の程度の著しい部分に「強（こわばり）」が出現する。人体の構造上、項および背部は津液の不足の影響を最も受けやすい場所であり、津液の不足の結果「項背強」が出現する。局所に対する津液の供給が不足する原因としては、①津液の不足と②湿による津液の供給障害の二種類がある。

- ① 胃の津不足 [ 肌の津不足 ] 筋肉の津不足 → 強（こわばり）  
脈外の津不足
- ② 肌・筋・肉の衛分に湿が存在すると、肌・筋・肉に対する津液の供給障害が生じる。そのため筋・肉の津不足が生じ、「強」が生じる。

したがって葛根を投与する目標として、必ずしも「項背強」が存在する必要はない。例えば傷寒・金匱のなかで葛根の入った五処方のうち、葛根黄芩黄连湯、竹葉湯、奔豚湯の三処方の条文には「項背強」の記載はない。また「欲作剛瘕」の葛根湯証には「項背強」ではなく「口禁不得語」とある。

[参考]

桂枝去桂加茯苓白朮湯（第28条）の「頭項強痛」は、湿により項部の筋が津液の供給を受けられず、「項強」が生じている。これをみても「項強」が湿によっても生じることが理解できる。

総論

葛根湯証・麻黄湯証・桂枝湯証における邪の比較

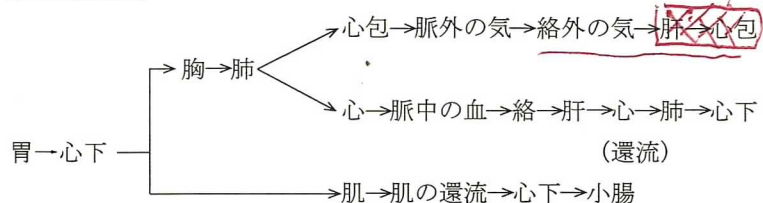
葛根湯証は風寒併重，麻黄湯証は寒邪重，桂枝湯証は風邪重である。

葛根湯：風邪	≡	寒邪
麻黄湯：風邪	<	寒邪
桂枝湯：風邪	>	寒邪

項背強

桂枝・葛根・麻黄と芍薬の組み合わせによる気・血・津の還流

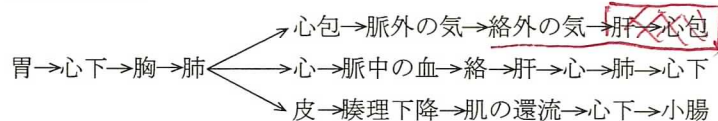
桂枝+芍薬



葛根+芍薬

基本的には桂枝+芍薬と同じである。ただし推進の力が強い。

麻黄+芍薬



桂枝+麻黄+葛根+芍薬

基本的には桂枝+芍薬と同じベクトルを有するが、脈中の血・脈外の気の還流はより強く、かつ肌の還流は最も強化される。

以上より葛根湯は、胃気を上方・外方の双方に強く促進する。その結果、脈中の血・脈外の気の推進、皮の衛気の推進、肌気の推進をはかる。また還流においては、脈中の血・脈外の気の還流を推進し、とりわけ肌の気津および肌湿の還流を強める。

桂枝加葛根湯は、胃気を上方・外方へ向かわせる力は桂枝湯よりも強い。しかし肌の還流は麻黄が入っていないため、葛根湯よりも劣る。

肌の還流路へ

脈中の血の推進 ↗ → 還流 ↗  
 脈外の気の推進 ↗ → 還流 ↗  
 皮気の推進 ↗ } → 還流 ↗  
 肌気の推進 ↗ }

桂枝加葛根湯

脈中の血の推進 → 還流  
 脈外の気の推進 → 還流  
 肌気の推進 ↗ → 還流 } 葛根湯より弱い

したがって葛根湯は、脈外の気津および肌の気津を推進して肌・肉・筋を潤し、また麻黄・芍薬、葛根・芍薬の組み合わせにて肌の還流をはかることにより、肌・筋・肉の湿を去る。

一方桂枝加葛根湯は、肌・肉・筋を潤し、肌の還流をはかることができるが、その作用は弱い。

~~葛根湯より~~ 葛根湯は

処方についての補足

麻黄湯、桂枝湯、葛根湯、大青竜湯、小青竜湯などは、麻黄、桂枝と同時に杏仁、芍薬、石膏などの肅降薬を併用することによって、各処方ごとに、それぞれに見合った昇降を考えている。一方いわゆる苓桂剂（苓桂甘棗湯一桂枝四両、苓桂朮甘湯一桂枝三両、桂苓五味甘草湯一桂枝四両）は桂枝を三〜四両使用し、芍薬、杏仁などの肅降薬を併用しない。桂枝を比較的少量に使用し、肅降薬は使用しないことによって、桂枝の上向性のベクトルを強調する処方となっている。

葛根湯証は、風邪が肌・筋・肉に存在し、筋・肉は熱を持ち、筋・肉への津液の供給が悪化（燥証のみでなく湿証もある）しているので、気平の葛根を四両使用し、温性の桂枝を二両にとどめて、脈外の気および肌気へ津液を供給している。また肅降、内向性のある芍薬を二両にとどめ、上・外方面へのベクトル性を強めている。

参考: 脈外の気は絡迄至ると. 外殻にありは肌の還流路へ.

腹内にもありは三焦にて回収される。

いる。脈外の気も腠理から一部外出することで、外殻のすみずみまで気を達せしめているのである。

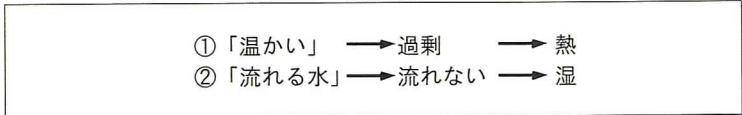
気の運行のために必要な機能

皮気：肺の宣散肅降・腎の気化・膈の出入・☆腠理の開閉

肌気：膈の出入・☆腠理の開閉

脈外の気：肺の宣散肅降・心の推動・☆腠理の開閉

したがって腠理が閉じて無汗になると、皮・肌・脈外の気はその運行を妨げられて、鬱熱を生じたり、湿を生じる。別の角度から述べる  
と、スムーズな運行ができなくなった気は、ある部分に過剰となる。  
「温かく流れる水」である広義の気が過剰になると病理変化し、熱あるいは湿として人体に障害を与えることになる。



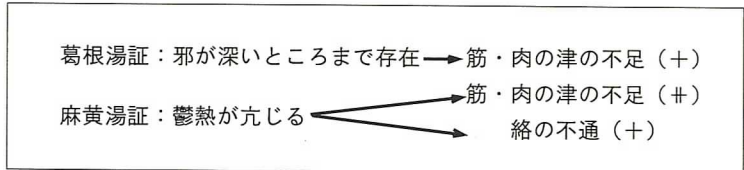
◆葛根湯証の「項背強」と麻黄湯証の「項強」について

葛根湯証には「項背強」、麻黄湯証には「項強」がある。両証とも、共通して寒邪の外束により皮膚が閉じている。しかし一般的な葛根湯証には肌・筋・肉にも風邪が存在し、また鬱熱があるため、筋・肉に対する気津の供給は病初期から悪化する。具体的には、肌を走る気津および筋・肉の深い場所を走る脈外の気津の供給が減少するために「項背強」を生じる。

一方、麻黄湯証は、肌・肉に鬱熱を生じつつあっても、肌・筋・肉の深さには風邪は存在しないので、鬱熱が充じてくるまでは肌津・脈外の気津の供給は一定保たれており、「項強」のみが生じる。しかし、鬱熱が充じてくると、熱のために筋・肉の津は枯れ、気津の供給が減少するだけでなく、筋・肉・骨への絡血の供給が悪化し、全身的な疼

痛を生じる。例えば、第35条「……身疼、腰痛、骨節疼痛……」のごとくである。

葛根湯証は、風邪が肌のみではなく筋・肉の深さまで達しているために、病初期から筋・肉への気津の供給が悪化している。しかしその程度は絡の不通を来すほどのものではない。一方、麻黄湯証は、寒邪が皮を外束し、肌・筋・肉の深さには邪は存在しないが、鬱熱が充じてくると筋・肉における気津の枯渇は甚だしくなり、津の供給の不足のみならず、絡の不通を惹起し、疼痛が起こるのである。



◆項・項背・身体の「強」について

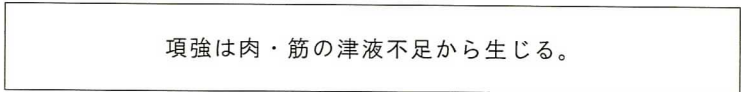
或は肉熱

桂枝湯証、麻黄湯証に共通する病理は、肌熱である。麻黄湯証の場合は無汗で肌の鬱熱、桂枝湯証の場合は自汗で肌熱が原因となって、頭項強痛が生じる。

麻黄湯：① 無汗，肌中に鬱熱一肉・筋に鬱熱一肉・筋の津液不足

② 無汗，肌中に湿熱一肉・筋に湿熱一肉・筋の津液不足

桂枝湯：自汗，肌中に熱一肉・筋に熱一肉・筋の津液不足



項部は頭を除けば最上部に位置し、津液不足の影響を受けやすい。次に影響を受けやすいのは背部である（筋・肉の量が大きい）。胸部の筋・肉も同じく津液不足の影響は受けるが、胸郭があるために、項背部よりは運動性がなく、また胸・腹と二分されているので伸展性も

条文解説

第32条 太陽与陽明合病者，必自下利，葛根湯主之。

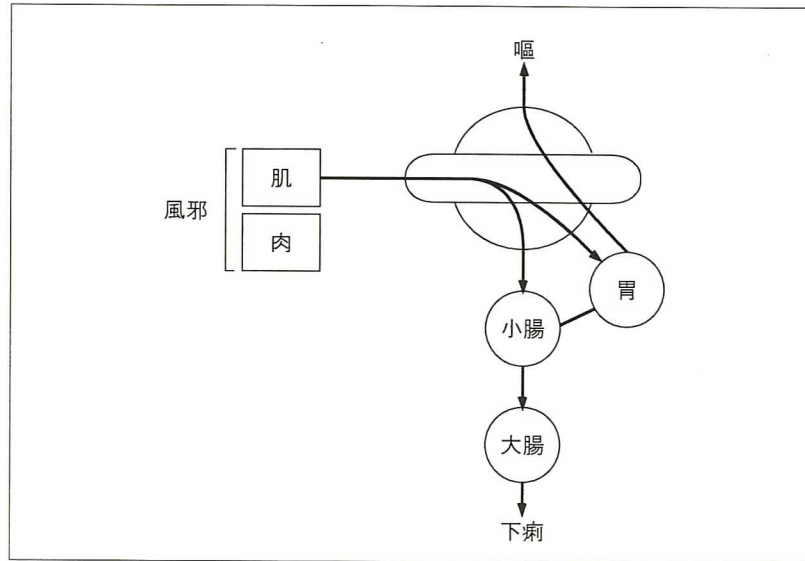
「太陽と陽明の合病のものは，必ず自ら下痢する。葛根湯がこれを主る。」

第33条 太陽与陽明合病，不下利，但嘔者，葛根加半夏湯主之。

「太陽と陽明の合病，下痢せず，ただ嘔するものは，葛根加半夏湯これを主る。」

第32条，第33条は主たる病位は太陽にあり，その勢いが同時に陽明にかかるものであり，葛根湯あるいは葛根加半夏湯にて対応する。

太陽・陽明の合病においては，いわゆる太陽病の「発熱」「悪寒」「無汗」などの症状と，裏の症状が同時に存在する。第32条，第33条における葛根湯証は太陽病における葛根湯証よりも相対的に風邪が強力なため，風邪は外殻（肌・肉）に展開するのみならず，一部の風邪は裏（胃・小腸）にも侵入する。風邪が小腸に侵入すると，小腸の分別作用が失調して「下利」，胃に侵入すると「嘔」となる。



◆太陽・陽明合病について

第32条と第33条は太陽と陽明の合病である。合病とは一病位の病が主であり，その勢いが同時に他の病位に及ぶものである。治療は主たる病位に対して行えばよい。

A（主）——— B（従） 治療はAに対して行う

太陽と陽明の合病は，太陽の症状と陽明の症状が同時に存在する可能性はあるが，その程度は必ずしも同じとはかぎらない。

- ① 太陽 > 陽明
- ② 太陽 ≒ 陽明
- ③ 太陽 < 陽明

第32条（葛根湯），第33条（葛根加半夏湯），第36条（麻黄湯）は太陽・陽明の合病であるが，治療は全て太陽の処方である。したがってこれら3条は太陽>陽明タイプの合病であり，条文に記載がなくても太陽の症候の一部が存在していると考えられる。

しかし，第172条，256条のような例もある。

第172条「太陽与少陽合病……黄芩湯」（少陽の処方）

第256条「陽明与少陽合病……大承気湯」（陽明の処方）

太陽・陽明の合病に対する治療法は，次のようにそれぞれ異なっている。

太陽と陽明の合病

- ① 太陽 > 陽明合病 一葛根湯あるいは麻黄湯
- ② 太陽 ≒ 陽明合病 一葛根黄芩黄连湯
- ③ 太陽 < 陽明合病 一承気湯，白虎湯の類

第34条の葛根黄芩黄连湯は，本来は太陽病，桂枝証の誤治から生ず

少陽

あるは麻黄湯加石膏、葛根湯加石膏も太陽と陽明の合病に使用できる。

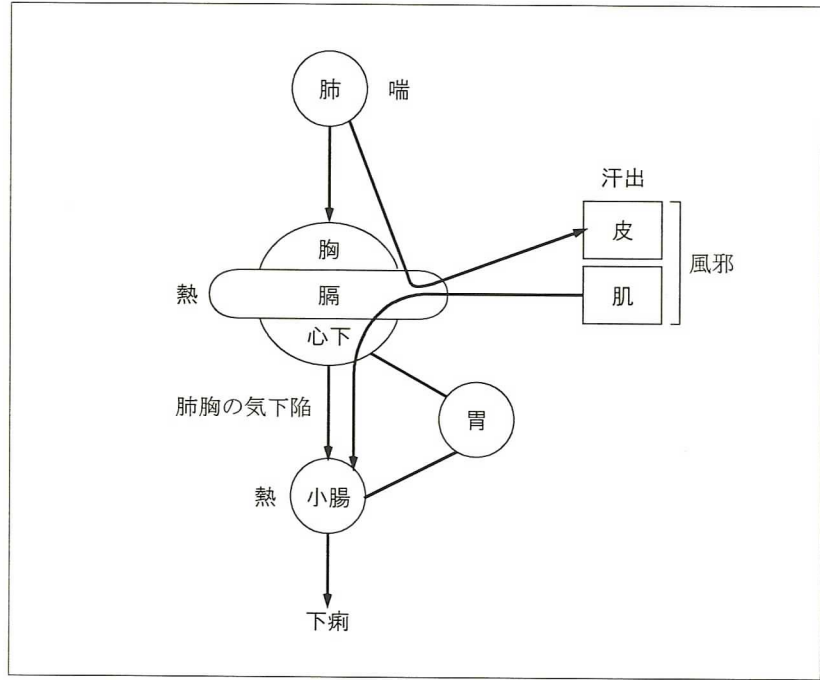
る症候に使用されているが、その方意からいって太陽と陽明の合病(② 太陽≒陽明)に応用することが可能である。

◆下痢について

太陽と陽明の合病は必ず「自下利」する。  
 太陽病：項背強几几，無汗，惡風  
 陽明病：自下痢

参考条文

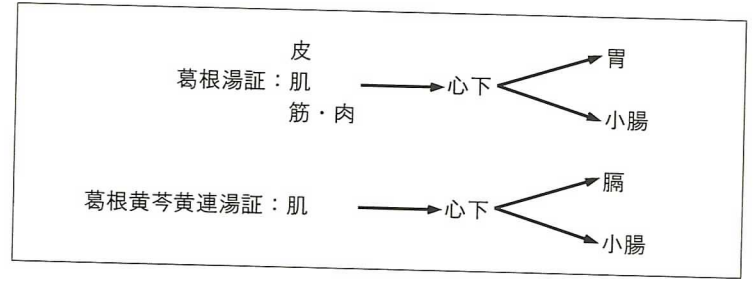
第34条 太陽病，桂枝証，医反下之，利遂不止，脈促者，表未解也。喘而汗出者，葛根黄芩黄连湯主之。



証

太陽病の桂枝湯証を誤下し、葛根を半斤(八両)使用する葛根黄芩黄连湯は、「利」があり「脈促」「喘而汗出」はあるが「項背強几几」はない。誤下によって肺・胸の気が下陷し「喘」するが、肌邪は除かれず「脈促」「汗出」する。誤下により肌邪は化熱して内陷し、膈・小腸は熱をもち、「利遂不止」となる。

葛根湯証の下痢は、前述のごとく正気と邪気との闘争関係の中で、相対的に風邪の力が強く、風邪は外殻のみではなく、一部は裏にも展開することによって生じるのである。葛根湯証あるいは葛根加半夏湯証は、風邪が小腸と胃に、葛根黄芩黄连湯証は、膈と小腸に存在する。



◆合病についての補足

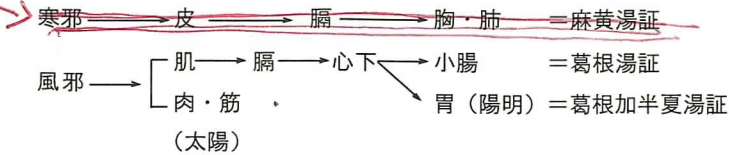
- 第32条 太陽与陽明合病者，必自下利，葛根湯主之。
- 第33条 太陽与陽明合病，不下利，但嘔者，葛根加半夏湯主之。
- 第36条 太陽与陽明合病，喘而胸滿者，不可下，宜麻黄湯。
- 第172条 太陽与少陽合病，自下利者，与黄芩湯。
- 第219条 三陽合病，腹滿，身重，難以轉側，口不仁，面垢，譫語，遺尿。……白虎湯主之。
- 第256条 陽明少陽合病，必下利。……宜大承氣湯。

第32条，第33条，第36条の太陽と陽明の合病は，外殻(太陽の部位)に寒邪・風邪が存在し，相対的に強力な風邪が外殻のみに留まらず，一部が内部に侵入して生じる。麻黄湯証は風邪が胸・肺(上方)に侵

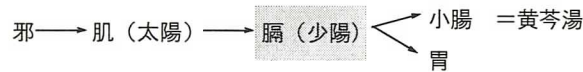
肌肉における邪熱が強く熱が胃に侵入し胃中の熱が下へ胃気は上へ向い胸気の過剰に胸膈、膈へ過剰に昇ると、痛降で喘がある

寒邪→皮外束→肌肉郁熱↑→胃熱→胸・肺 = 麻黃湯証

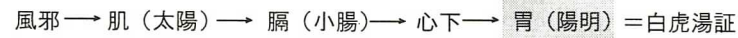
大し、葛根湯証、葛根加半夏湯証は風邪が胃・小腸（下方）に侵入して合病を發する。



第172条の太陽と少陽の合病は、邪の主体は少陽（膈を中心とする部分）にあり、その影響が小腸または胃に及ぶ。よって黄芩湯を投与する。



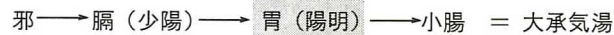
第219条の三陽の合病は、風邪の勢いが強く、発病とほとんど同時に太陽・陽明・少陽の部位に展開するが、邪の主体は陽明にあるため、白虎湯を投与する。



後の時代の処方である〈柴葛解肌湯〉は、三陽の合病に応用できる処方であり、邪は太陽・陽明・少陽に満遍なく分布している。

- ① [傷寒六書・柴葛解肌湯方] 柴胡 黄芩 乾葛 芍薬 羌活 白芷 桔梗 石膏 甘草 生姜 大棗
- ② [浅田家・柴葛解肌湯方] 柴胡 葛根 麻黄 桂皮 黄芩 芍薬 半夏 生姜 甘草 石膏

第256条の陽明と少陽の合病は、邪の主体は陽明にあり、大承気湯を投与する。



瘧病

参考条文

傷寒論・弁太陽病脈証併治上第五

- 第1条 太陽之為病，脈浮，頭項強痛而惡寒。
- 第2条 太陽病，發熱，汗出，惡風，脈緩者，名為中風。
- 第3条 太陽病，或已發熱，或未發熱，必惡寒，体痛，嘔逆，脈陰陽俱緊者，名為傷寒。
- 第6条 太陽病，發熱而渴，不惡寒者，為温病。若發汗已，身灼熱者，名風温。風温為病，脈陰陽俱浮，自汗出，身重，多眠睡，鼻息必鼾，語言難出。

金匱要略・瘧濕暍病脈証第二

- 第1条 太陽病，發熱無汗，反惡寒者，名曰剛瘧。
- 第2条 太陽病，發熱汗出，而不惡寒，名曰柔瘧。
- 第3条 太陽病，發熱脈沈而細者，名曰瘧，為難治。
- 第4条 太陽病，發汗太多，因致瘧。
- 第5条 夫風病下之則瘧，復發汗必拘急。
- 第6条 瘧家雖身疼痛，不可發汗，汗出則瘧。
- 第7条 病者，身熱足寒，頸項強急，惡寒，時頭熱，面赤目赤，獨頭動搖，卒口噤，背反張者，瘧病也。若發其汗者，寒濕相得，其表益虛，即惡寒甚，發其汗已，其脈如蛇。
- 第8条 暴腹脹大者，為欲解。脈如故，反伏弦者瘧。
- 第9条 夫瘧脈，按之緊如弦，直上下行。
- 第10条 瘧病有灸瘡，難治。
- 第11条 脈經云，瘧家其脈伏堅，直上下。
- 第12条 太陽病，其証備，身体強，几几然脈反沈遲，此為瘧。栝樓桂枝湯主之。
- 第13条 太陽病，無汗，而小便反少，氣上衝胸，口噤不得語，欲作剛瘧，葛根湯主之。
- 第14条 瘧為病，胸滿口噤，臥不着席，脚攣急，必齧齒，可與大承氣湯。

「太陽病で無汗，小便はかえって少なく，衝気が胸を突き上げ，口がこわばってしゃべることができないのは，剛瘧になろうとしているからである。葛根湯がこれを主る。」

太陽病ではあるが，風寒邪が皮・肌のみではなく筋・肉の深さまで至っている。寒邪が皮・皮膚を外束しているので，皮膚は閉じて「無汗」である。肌・筋・肉には風邪が存在する。邪正闘争のために鼓舞された胃気は，主として脈外の衛気，肌気として外殻に出て行くが，風邪が存在し，皮膚が閉じて，小便も少ないため，正常に運行できず，湿に変化する。そして湿は肌・筋・肉への気津の供給を阻害して，筋・肉はこわばる。頭顔部の中でもとりわけ筋肉が多く，しゃべったり，咀嚼のためによく動かす口の周りの筋肉（絡が豊富）が，湿のために脈外の気の供給を阻まれて口をあけてしゃべれない「口噤不得語」。皮膚が閉じ，外殻全体に湿があるため，皮・肌の還流が悪化し「小便反少」。この病態が進行すると，口の周りだけではなく，項背部の筋・肉も気津の供給を阻まれて，「剛瘧」を発することになる。

#### 処方解説

麻黄・桂枝，葛根・桂枝にて，皮気，脈中の営血，脈外の気，肌気を推進し，麻黄・芍薬，葛根・芍薬にて皮，肌の還流をはかる。その結果，湿を去り，気津の不足した所に気津を供給し，「欲作剛瘧」は治癒する。大棗，甘草，生姜で胃の気津を守り，供給する。

湿による「欲作剛瘧」に対して葛根湯を用いるのであるが，「剛瘧」になったらいかなる処方を用いるのであろうか？

→瘧病は湿が脈外の気津および肌の気津の流れを阻んで生じる病態なので，朮，蒼朮仁などを加えればよいと考える。脈中の営血，脈外の気をさらに推進するには，附子を加える。

また，湿と風によるものではなく，外風，内風が相搏って剛瘧を発したものは，葛根湯に熄風薬(ex.全蝎，蜈蚣，地竜，白僵蚕)を加えるとよい。

## 桂枝加葛根湯

### 条文

第14条 太陽病，項背強几几，反汗出惡風者，桂枝加葛根湯主之。

方 葛根四兩 芍薬二兩 生姜三兩切 甘草二兩炙 大棗十二枚擘 桂枝二兩去皮

上六味，以水一斗，先煮葛根，減二升，去上沫，内諸薬，煮取三升，去滓，温服一升。覆取微似汗，不須啜粥，余如桂枝法将息及禁忌。

（宋版傷寒論における桂枝加葛根湯の処方内容は，葛根湯と全く同じであるが，桂枝加葛根湯は桂枝湯加葛根という説もあり，そちらを採用した。）

### 条文解説

第14条 太陽病，項背強几几，反汗出惡風者，桂枝加葛根湯主之。

「太陽病で項背がこわばり，かえって汗が出て悪風する者は，桂枝加葛根湯がこれを主る。」

桂枝加葛根湯証は桂枝湯証と異なり，風邪が肌のみではなく筋・肉の深さにまで侵入しているが，葛根湯証のように寒邪が皮を外束していないので，腠理は閉ざされず「反汗出」する。肌邪もあるが，主として筋・肉に風邪が存在し，邪正闘争が惹起され，熱をもち，筋・肉への津液の供給が減少し，体の上部に存在する大きな筋・肉がこわばる「項背強」。肌・筋・肉における邪正闘争のために，胃気は脈外および肌に振り向けられるので，皮気は減少する。そのため「悪風」が起こる。



大承気湯で治療する瘧病は、風邪が表裏にまたがって存在し、またその病理変化も表裏にまたがって現れる。ただし病邪の主体、病理変化の主体は外殻にある。そのために「可与大承気湯」である。もし病邪の主体が胃に存在するのであれば、「大承気湯主之」となるはずである。瘧病は大承気湯の正証ではないが、大承気湯の力を借りて、裏邪、裏証のみでなく、外殻の邪および外殻の病理変化にも対応しているのである。

## 葛根黄芩黄连湯

### 条文

第34条 太陽病，桂枝証，医反下之，利遂不止，脈促者，表未解也。喘而汗出者，葛根黄芩黄连湯主之。

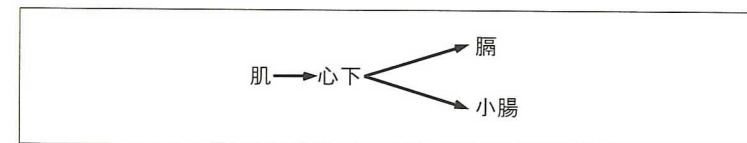
方 葛根半斤 甘草二両炙 黄芩三両 黄连三両  
上四味，以水八升，先煮葛根，減二升，内諸薬，煮取二升，去滓，分温再服。

### 条文解説

第34条 太陽病，桂枝証，医反下之，利遂不止，脈促者，表未解也。喘而汗出者，葛根黄芩黄连湯主之。

「太陽病，桂枝湯証を誤下し，下痢が止まらなくなった。脈が促のものは，表証がまだ残っており，なおかつ邪が内陷したものである。喘して汗が出るものは葛根黄芩黄连湯が主る。」

太陽病・桂枝湯証。すなわち風邪が腠理から直接肌の衛分に侵入した病症に対して，誤下を行い，下痢が止まらなくなり，脈は促を呈する。桂枝湯証を誤下したのであるが，肌表に邪は未だ残存し，一部の邪は肌から筋・肉へ侵入し，一部の邪は肌から心下を経て，膈や小腸に内陷する。



誤下による下痢は，下痢の影響が消失すれば普通は自然に止むはずであるが，この証の「利遂不止」は邪が膈・小腸に内陷したために，小腸の分別作用が失調して，遂に下痢が止まらなくなる。

① 誤下による下痢 → ② 邪の内陷による下痢  
また誤下により上焦（肺・胸）の気が下陷し、一時的に上焦の気は虚してしまい、肺の宣散肅降に異常を来たし、「虚喘」を呈す。

誤下による肺・胸気の虚にもかかわらず、肺は浅く早い呼吸により、胃気（正気）を外殻に供給し、邪正闘争を担おうとする。しかし胃気のしっかりしたバックアップがないので、宣散肅降の頻度だけは増すが、実体としての宣散肅降は失調し、正気を外殻に送り出せないばかりか、自ら喘を呈することになる。

誤下に続いての下痢により、胃津は消耗し、外殻（肌・筋・肉）の津液は不足する。肌表に邪が残存し、それに対して肺の宣散肅降は異常に亢進（頻回の浅く早い、一種のモーターのカラ回りに近い状態）するために、肺気は心包にスムーズにはつながらず、脈は「数而時止」を呈す。もともと桂枝湯証には「自汗」があり、この証においても肌表に邪が残存しているために「汗出」がある。また上焦肺気の虚は、皮膚の開閉失調を惹起し、その結果として皮膚は開いて汗出する。

◆促脈について

参考条文

- ① 第34条 太陽病……脈促者，表未解也。
- ② 第140条 太陽病，下之，其脈促，不結胸者，此為欲解也。
- ③ 第349条 傷寒脈促，手足厥逆，可灸之。

① 「表未解」の促脈

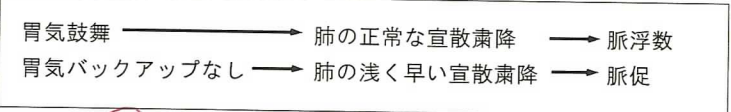
第21条 太陽病，下之後，脈促，胸滿者，桂枝去芍薬湯主之。

第34条 太陽病，桂枝証，医反下之，利遂不止，脈促者，表未解也。喘而汗出者，葛根黄芩黄连湯主之。

両条ともに太陽病を誤下し、胸・肺の気が下陷して（胸気が虚して昇降出入が不利、肺気が虚して宣散肅降が不利）、「胸滿」「喘」を生じている（虚滿、虚喘）。しかも誤下した後も太陽の邪は、ほとんどが表に留まっている。両条における「脈促」は「表未解」を示すもの

である。もし太陽病を誤下した後も、まだ邪が表に留まり、さらなる人体側の陰陽失調を来していないなら、脈は始めと同じく浮を呈するはずである。したがって「脈促」を呈するものは、誤下した後「表未解」ではあっても、新たに一定の陰陽失調、人体側の気機の失調が加わったものであるといえよう。

誤下により一時的に胸・肺の気が虚してしまっているが、表邪に対して邪正闘争をなんとか展開しようと頑張っている。つまり一時的に虚してしまった胸・肺は、しっかりした胃気のバックアップを得られないままに、一種のカラ廻りに近い状態で、表邪に対抗しようと努力しているのである。しっかりした胃気がバックアップされないまま、肺の宣散肅降を早くして、浅くて早い呼吸をすることにより、表邪を追い出そうとするが、力不足によって表邪は残存したままである。胃気のバックアップの少ない、浅い早い呼吸による肺の宣散肅降のため、肺気も心包の気にもうまくつながらず、「数而時止」の促脈を呈するのである。促脈は、誤下した後も表邪が残存していることを示す脈であると同時に、誤下した後、肺・胸・胃の気が下陷し、虚した肺は胃気のバックアップを受けられないまま、それでも表邪に向かって邪正闘争を担おうと、一定の非効率性をかえりみず、頻回に宣散肅降を行っていることを示している。したがって胃気のバックアップを受けることが可能になれば、すぐに正常な宣散肅降機能が回復し、表邪を駆逐することが可能となる。



治療は、下陷し虚した肺に対して葛根、桂枝、生姜などを使用し、胃気を肺に供給することである。

② 「此為欲解」の促脈

第140条は誤下した後、表邪は内陷せず表に留まっているが、胃気

は消耗せず、むしろ積極的に外殻（皮気・脈外の気・肌気）に多量に供給される（一種のリバウンド状態）。肺は、宣散能力の限界近くまで胃気の供給を受けるので、時に肺の宣散能力はオーバーしてしまう。つまり肺から心・心包へも胃気がどんどん供給されるのであるが、一瞬肺の宣散能力を越えた時、肺気は心包につながらず、「脈数而時止」となる。

これは第208条の大承気湯に病理機序は近い。これ以上胃気が肺に供給されると、次は脈促から脈遅になる可能性がある。以上のごとく、肺の宣散能力の限界近くまで胃気が鼓舞され、外殻に向かうので、表邪は正気により駆逐される。

③「手足厥逆可灸之」の促脈

第349条は胃・腎の陽気の不足した状態で、手足の「厥逆」がある。胃気の不足を代償するごとく、心・心包は積極的に拍動を行い、脈は数を呈す。胃気の不足を心・心包の代償的亢進により補填し、四肢末端まで営血、脈外の気を送ろうとする。しかし胃気の不足のために、時には営血は併走できず、「数而時止」の促脈を呈する。とりあえず灸で治療するが、最終的には胃・腎の陽気を鼓舞し、バックアップする治療が必要となろう。

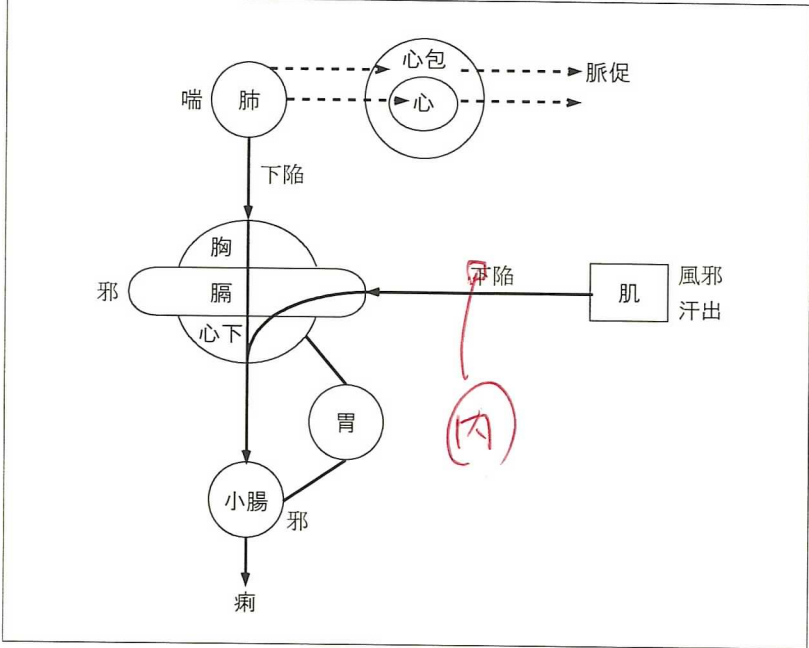
参考文：285条「少阴病、脈細沈数、病为在裏、不可发汗」

処方解説

多量の葛根（半斤＝八両）にて下記のことを解決する。

- ① 胃気を心下一肌へと張り出させて、肌邪を腠理から駆逐する。（去邪）
- ② 胃気を上方の肺、外方の肌へ推進することにより、下向きのベクトル性を有する「痢」を治療する。（止痢）
- ③ 胃津を生じさせ、肌に張り出させることにより、肌津を潤す。（生津）  
黄連三両で小腸の熱を、黄芩三両で膈の熱を清す。また炙甘草二両にて守胃する。

①②と同じく、胃気を脈外の気へ供給し、肉筋にある風邪を駆逐する。



肺の宣散が心包に繋がるから

心包に繋がる

(内)

肌